11. 思い出のカーテン

各務原市立那加第一小学校６年
早川　真由　　藤村　咲穂
↓
敦賀市立赤崎小学校５年
和田　実寿穂

「ひどい……ひどすぎるよ」
　せみの声がジリジリ聞こえる中で、りかはやっと聞こえるくらいの声でため息をつきました。
　そして、今日やるはずじゃなかった宿題をやりました。
　キッチンつきのリビングにいるのは、りか一人だけで、さっきからせわしなく鳴き続けているせみの声もなんだかさみしいものでした。
　宿題はすぐ終わってしまい、またため息をつきました。
　りかが考えていた夏休みはこんなつまらないものだったわけではありません。本当なら今日から一週間、海の近くのペンションで過ごすはずだったのです。とても楽しく…。
　でも、それはお母さんの一言で、あわになってきえてしまったのです。
「りか、あなた今年中学受験でしょう。受験生が海なんて行っていいのかしら。夜はお父さんが帰ってくるだろうし、昼ぐらいはりか一人で大じょうぶよね。りか、一週間ぐらい、いいわよね」
　りかのお父さんは、仕事がとってもいそがしく、帰ってくるのがおそいので、りかはあまりお父さんと過ごしたことがありません。朝も出かけるのがすごく早いのです。
　せっかく楽しみにしていたのに、りかは旅行にいけないのです。
　もちろん、お母さんに言い返しましたが、
「りかのためを思って言っているのよ」
　と、言われてしまいました。
　みんな行かないのかと思いきや、お母さんたちはちゃっかりりかをおいて旅行に行ってしまったのです。
　本当に私のことを思っているなら、旅行ぐらいつれていってくれればいいのにと、りかは思います。
　たしかにお母さんのいうとおり、りかは今年中学受験をします。だからといって娘を「受験、受験」とおいつめることが本当に子どもを思っている母親のすることなのでしょうか。
（お母さんは、どうして私をおいつめるの）
　そう思うと、なみだがあふれ出て、止まらなくなりました。
　りかは声を出さずに泣きました。一人で、ただただ泣きました。
　しばらくの間、なみだが止まることはありませんでした。

　気がつくと、なんと二十分もたっていました。りかは、赤くなった目をゴシゴシとふ

き、階段を上がります。行き先は自分の部屋でした。
　用はないのですが、不思議と足が自分の部屋に引き寄せられているような気がしました。
　りかは、いい方に考えることにしました。
（受験に合格すれば、海よりもステキなところに行ける。かわいい服がたくさん買ってもらえたりするかも……）
　むりやり気分をふるいたたせ、りかは、自分の部屋に向かいます。そして、いきおいよくドアをバタンッとあけました。
　するとそこは、いつものりかの部屋ではありませんでした。
　りかの机があった所には大量の布がつんであります。
　りかは立ちすくみました。
「何なの？　これ」
　おどろきで、声がかすみます。
（ここは自分の部屋のはず……）
　りかの頭の中はこんらんしました。
　何がなんだかよく分からないのですが、どうやらお店のようになっています。
　その時、どこからか、
「おーい」
　と、しわがれた声がしました。
　りかは、声の主を探してあたりをぐるりと見わたしました。
　すごく年をとったのっぽのおじいさんと、近くのいすにすわっている、まだ生まれてまもないような小さな赤ちゃんが目に止まりました。
「だいじょうぶ？」
　赤ちゃんが、言葉を発しました。
　まだ生まれてまもない外見だというのに……。
　りかはびっくりして、ぎゃくに冷静さをとりもどし、改めて店の中をよく見わたしてみました。
　さっきはおどろきのあまりしっかり見ていませんでしたが、店の中にはたくさんのカーテンが置いてあります。
　もも色、あい色そしてすきとおるような黄緑色です。
　おじいさんはりかに近よると、しゃべりはじめました。
「わしゃあ、トトじゃ。見てのとおり、ここはカーテン屋をやっとって、わしはここの店長じゃよ。まあよろしくのう。そして……」
　おじいさんはいすにすわっている赤ちゃんをさして、りかにしょうかいしようとしました。すると、
「ちょっと。それぐらい自分で言えるわヨ。それに、人を指さないでくれるかしら。おじーさまぁ」
　と、赤ちゃんがさえぎりました。
「わしゃあトトじゃ。まだ、じいさんではない」
　と、おこるトトを赤ちゃんはほおっておいて、

「アタシはキャンベル。女の子よ。ま、よろしく。りか」
　と、なまいきそうに、じっとりかを見て自己しょうかいをしました。
　りかは少しむっとしました。
　あかちゃんに、「りか」だなんて呼びすてにされたくないのです。でもその反対に、少し笑ってしまいました。
　だって、名前がトトにキャンベルなのです。あの二人には失礼だけど、こんな変わった名前を聞いたら、やっぱり笑ってしまいます。
　りかは、二人に自分のしょうかいをしていないことに気付き、少しうろたえながらも、
「私はりかよ。なんだか知ってるかんじだけどね。よろしく。トト、キャンベル」
　と、いいました。
　トトとキャンベルは、
「今回、りかは初めての客だから無料でおためししてもいい」
　と、言って、りかに菜の花色のきれいなカーテンをすすめました。
　期限は一週間だそうです。どこかで聞いたことのある言葉です。
　りかは、不思議な、菜の花色のカーテンを見つめました。りかの頭に、次々と疑問が出てきました。
（ここはいったい何？　何で私がここに？）
　とにかく、不思議なことがたくさんです。
　いろいろ聞かなきゃと顔を上げると、そこはいつものりかの部屋でした。でもトトとキャンベルのすがたもありません。
「あれ、トト、キャンベル。どこなの？」
　りかが聞いても、部屋の中はしずまりかえっています。
（夢だったのかなぁ）
　と、思ったときでした。
　りかは、いつもの部屋とちがうところを見つけました。
　窓のカーテンです。あの店でかしてもらった菜の花色のカーテンなのです。夢ではなかったのです。
（それにしてもいつの間に……）
　さっきまでりか自身の手にあったはずです。
　心の中でいくら問いかけても、だれも教えてくれはしません。
　窓では、あのカーテンが菜の花色に光って静かにゆれるだけでした。

　りかはしばらくボーとしていました。そして、何気なくカーテンを開けました。
「あっ、あ……」
　りかはびっくりしてドスンとしりもちをつきました。
　そこはいつもの風景ではなく、いちめんの菜の花畑だったのです。
　今日はなんておどろかされる日でしょう。りかは、ドキドキしながら窓の外をながめていました。すると、あることに気付きました。
（今は夏なのに、この花畑は、春に咲くはずの菜の花だ）
　と、いうことです。

　しばらく考えたあげく、りかは入ってみることにしました。おそるおそる足を入れて、ギュッとふみます。
「かたい……」
　りかの部屋は二階にあるので、本当ならここは空中のはずですが、ここはちがうのです。空中に花畑があり、下には落ちません。
　りかはうれしくなって、花の中に飛び込みました。
　菜の花のいい香りがひろがりました。夢ではありません。
　菜の花畑はずっと遠くまで広がっていて、地平線が見えました。
　りかは、急に力がぬけてその場にたおれこみました。

　風がりかをくすぐります。
　りかが目を開けると、そこはいつもの世界と同じように、空が広がっていました。
　その空は、青い、きれいな水色でした。
　りかは太陽をさがしてみましたが、この世界では見つけることはできませんでした。でも、この世界は光とあたたかさでみちています。
　菜の花がひだまりのようにりかをつつみこみました。
　りかは、菜の花がその光とあたたかさでりかの心をなぐさめていてくれるような気がしました。
　すっかり心があたたかくなったりかは、そのままねてしまいました。この花畑はりかを守るようにして、やさしくゆれています。
　りかはぐっすりねむってしまい、自分の部屋の中で電話がずっと鳴り続けていることに気が付きませんでした。☆

　りかは、夢をみていました。
　それは、今までいた菜の花色のカーテンから、サクラやタンポポなど他のカーテンの中に入る夢です。
　夢の中にも、トトはいました。トトはここでも、
「期限は、一週間じゃ」
　と、言っていました。
　りかは、一週間後にはお母さんが帰ってくることを思い出し、パッと目をあけました。時計をみると、ずいぶん時間が経っていました。
「受験もあるのになぁ。のんびりしすぎちゃった」
　と、りかは言いました。
　窓をしめて、りかは机に向かい勉強を始めようとしました。
「めんどうだな。暑いな」
　と、言いながらパラパラと教科書を見ていました。
　どうしても気持ちが入らなくて、だんだんいやになってきました。
「もう、いやぁ」
　と、大声でさけびました。
　そのときです。

　あのカーテンから、すずしい風がふいてきました。
　菜の花のいい香りもしてきます。
　りかは、やる気が出てきました。やる気になったりかは、今までのんびりしていた分、取り返そうと思いました。

　その日の分の勉強が終わりました。
　すると、菜の花畑の方から何やら声がします。
　それは、小さくて、とってもとってもかわいらしい声でした。
「ねえ、ねえ。りかちゃん、いっしょに遊ぼう。私はあまえんぼうのハニー」
　と、言っています。りかは、声のする方へ進んでいきました。
「ねえ、ハニーちゃんていったい何？」
　と、たずねると
「私は、この菜の花のカーテンのようせい。カーテンにはようせいがそれぞれ一人ずつついてくるの」
　と、言うので、りかは
「それじゃ、カーテンの期限がきれる一週間後には消えてしまうの？」
　と、聞きました。
「うん。でも本当はずーっとここにいて、いろんなお客さんと遊びたいの。私、あまえんぼうだから、お客さんが来てくれるのすごく楽しみにしてたの……」
　と、言いました。りかは、
「じ……　じゃあ、トトとキャンベルって知ってる？　知ってたら、どうやったら二人に会えるのか教えて！」
　と、続けてたずねました。
「うん……。知ってるよ。地平線がみえるでしょ？　そこに一軒のカーテン屋があるんだ。私、一人になるのいや……　すぐ帰ってきてね」
　りかはカーテン屋が、見てみたくてワクワクしてきました。
「うん。ありがとう」
　と、言って、ハニーをおいてそのカーテン屋に向かいました。
（近そうで遠いなあ……カーテン屋さん）
　　ハアーハアーハアーハアー
　りかは、一生懸命に歩いても、十五分もかかる所にあるカーテン屋さんに、ドォンと大きな音を立てて入っていきました。
　そしてカーテン屋の中にいたトトとキャンベルにあいさつもしないでいきなり、
「今ね、菜の花のようせいハニーちゃんと会ってきたんだけど、みんなですごいカーテンを作って、いろんなようせいを入れようよ」
　と、言いました。キャンベルが
「りかも手伝ってくれるなら……」
　と言うと、トトも、
「わしもさんせいじゃ」
　と、言いました。りかは、

「もちろん私も手伝うわ」
　と、言って、ハニーの所まで走って戻りました。そして、
「ぜーったいにハニーはいい子だから、ハニーを入れた四人で、すてきなすてきな見たこともないすごいカーテン作ろう」
　と、言うと、ハニーを連れてカーテン屋まで走って行きました。
　そして、キャンベルとトトに、
「一週間以内に作らないといけないから、急いでね」
　と、言うと、さっそくカーテン作りが始まりました。
　いろんな生地を切ったりミシンでぬったりしました。でもすごいカーテンですから、ふつうに切ったりぬったりだけではないのです。
　きれができあがるとその上にいろんな種類の花の種をまいて、その上から〈まほうのすな〉をさらさらとふりかけます。
　それが、りかにはすな遊びをしている子どものように見えてしまい、急ぎながらも笑顔で作業を続けました。
「でも、ここからじゃ」
　と、急にトトの声がしました。
「それはのう。これはとても早い方法なんだが、それでも一週間ぐらいしないと花がさかないんじゃ」
　りかは、
「一週間後がいいって言うのは、ハニーちゃんが消えてしまうからなの……。四人でいっしょにすごいカーテンを見たいよ」
　と、とっても残念そうに言いました。
　でも、ほかの三人は楽しそうです。トトが、
「わしの話は、まだ途中じゃよ……。わしとキャンベル二人で作ってきたカーテンには、ようせいが一つにつき一人……。ミレの花にはムム、サクラにはピースなど全部数えれば、百人をこえるくらいおるぞ。今日一日で完成できるぞ。そのとき、ようせいたちがみんな花に変わるんじゃ。わしは、タンポポのようせいじゃから、タンポポに変わるというわけじゃ」
「私はひまわりのようせいよ」
　と、キャンベルが言いました。
「がんばって作ろうね」
　と、言うりかでしたが、ここまで、あまりに一生けん命にカーテンづくりをしてきたので、やわらかなカーテンの生地に触れると、その生地の山の中に包まれるようにたおれて、ねむってしまいました。

　また、ずい分と時間が経ち、次の日の朝になりました。
　りかが目を覚ましたのは、カーテンの生地の中のはずです。
　ところが、ぼんやりと開いたりかの目の前には、ちょうちょ、バッタ、ハチなどがいて、サクラ、菜の花、コスモス、チューリップ、グラジオラス、ひまわり、すみれ……無限に続く季節を超えた花畑が見えました。三人とほかのようせいたちは、みんな花に

なってしまったのでしょう。
「私がねむっている間に、みんながカーテンを完成させたんだわ」
　りかは、思いました。
　このカーテンのところへくると、いつでもたくさんの花が輝き続け、りかをはげまし勇気づけてくれるのでした。

　翌年の春、りかは受験に見事合格しました。
「おめでとう」
　と、カーテンの中から声が聞こえます。ようせいたちの声です。
　春夏秋冬、二十四時間いつまでも消えることのないすごいカーテンです。りかは、旅行にでも行ったようなすてきな気分でした。
「去年の夏は、お母さんたちよりもいい旅行ができた気分だわ」
　と、りかは思うのでした。

　今でもときどき、ようせいの声が聞こえてきます。
　声を聞くと、りかには四人とのすてきな夏の思い出がうかんできます。
　もちろん、りかは、このカーテンのことをだれにも話してなんかいません。